

金子光晴全集



第四卷



金子光晴全集

第四卷

金子光晴全集 第四卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六二)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六

昭和五十一年六月十日印刷
昭和五十一年六月二十日発行



詩

IV

目次

屁のやうな歌

II

泥の本

よごれてゐない一日

若葉のうた

愛情 69

後記

444

323

237

187

143

45

5

屁のやうな歌



屁のやうな歌 目次

無題

ある夕暮に

——一人の友に

火

無題

生と死

無題

象の唄

アメリカの唄

無題

——新しい鄭衛の地にゐて

我は英雄

猿

鴉

無題
朝／＼LOUANGE
いまはない花に

30 28 26 24 23 21 18 17 15 14 12 11 9 7

無題

映寫幕からぬけ出すと無頼漢たちは、すぐさま、射ちあひをはじめた。

馬尾^{ポニーテール}髪や 脱色髪^{ブリーチ}の女たちが、町角に立つて

目の前で、水泡のやうにつぶれるいのちを、浮き袋のやうに空氣のしぼんでゆくからだを

よそごとのやうに尻目にかけて、おしやべりに身を入れてゐた。

娘つ子のみてゐるところなので、敵も、味方も氣取つてゐた。

掌のうへでくると返へす拳銃の、かまへ直しの手さばきも

早うち^{はやうち}の粹なポーズも、やくざらしい、なげたしぐさの一一^{いちいち}が

うたれて倒れるかたちまで、芝居がかりになるのだつた。

陽はみぞれいろ

蟻塚のやうに

土は、ぼけぼけ。

風景とおなじやうに、荒廢した日本のところに、アメリカが、ペイント塗り立てで、

黄ろい標柱を立てた。(——天國への里程)
苜蓿うまごやしのなかに。

ブリキの空罐と、

藥莢。

用途不明な部分品。血のついたハンカチーフ。

女たちからすこし離れて評定してゐる、ペイント塗り立ての若い衆たち。

その一人が電話にかじりつく。細腰を、貧乏ゆすりさせながら

「な。すぐ出てこいよ。な。學校なんか、どうでもいいからよう。いい話で、みんな待つてゐる。」

カリブソたちに、アメリカの柱よりも、俺たちの、腰のつよいところを、みんなで立ててみせてやるところだからよう」

ある夕暮に

こんなふうに
日はすぎてゆく。
ガラス窗を
斜^{はしか}ひに^かつて。

すこし焦げた
パンのやうに
愛情で
まるくふくれて

男と
その女がある。
が、毎日が
日曜ではない。

こんなふう
に日は過ぎてゆく。
大事なものは
ないもない。

大事なものは
ないもない。
帽子も、
万年ペンも。

水平線の
棚のうへに
忘れてゐる。
のせたまま。

——一人の友に

そこにじつと

水のわくやうに

彼はゐた。

そのまはりに、

じぶんから

にじみ出すものを

のぞき込むことで

夢中になつて。

彼はゐた。

耳をすませて、

鏡の奥から

きこえる唄に。

愛情は

なにも知らない。

透明のはてが

死だといふことも。

火

愛情にも

嫉妬にも

まだ、火がついてゐない。

マッチは、そばにある。

マッチは、たつた一本でいい。

それをするのも

それをすらないのも

あなたのころまかせ

手にとりかけたマッチを、

僕は、そつと置く。

おやすみ。しづかに。

Ne dérange pas.

愛情も

嫉妬も

ねむつてゐるそばを

足音忍ばせて、僕はすぎる。

無 題

あの皺だらけな

胃袋のことは忘れよう。

洗ひざらした

わしではあるが、

グイルメ
美食家と

グイルマン
大食家の別は

まだ、こころえてゐる。

おお、世の御婦人がたよ。

くさつたあまり肉をあさる

わしは、ハイエナではないつもりだ。

あの胃袋は

高い梢にかけたまま、